ZOCALO 2016 8▸9

ZOCALO＝ソカロはメキシコの都市の広場を意味するスペイン語。埼玉県立近代美術館はアートを通して交流する市民の広場をめざしています。

埼玉県立近代美術館 ←→ 遠山記念館

企画展「竹岡雄二　台座から空間へ」
2016年7月9日（土）～9月4日（日）

竹岡雄二氏にドイツで初めてお目にかかってから、かれこれ四半世紀ほどになる。回顧展の話は早くから出ていたが、今回、国立国際美術館と埼玉県立近代美術館、遠山記念館の三館体制で実現されることになったことを大いに喜びたい。ずいぶん時間がかかりはしたが、粘り強く準備を進めてきた甲斐があって、最終的に遠山記念館の参加が決定し、小規模ながら和風建築の特質を生かした展示が可能になった。そのことは場所と作品との呼応を重視する竹岡氏にとっても、企画者側にとっても、そしてもちろん観客の方々にとっても、同時開催の埼玉近美の展示との比較ができることも含めて、これまでの個展とはかなり異なった意義をもつに違いない。

建畠哲（埼玉県立近代美術館 館長）

Takeoka & Tatehata (Insel Hombroich) 1992
photo: kw (*YUJI TAKEOKA*, WAKO WORKS OF ART, 1992)
デュッセルドルフ郊外のインゼル・ホンブロイヒ美術館にて、エルヴィン・ヘーリッヒの作品を見る竹岡雄二（左）と建畠哲（右）

1　竹岡雄二《無題》1996年　個人蔵

私は彫刻を載せる台座をテーマに台座彫刻を作りはじめ、その後、空間において「もの」を呈示する作品へと展開させていきました。「もの」を作ることから「もの」を見せる仕事へという展開は、私のライフワークへと発展しています。美術館などの制度的空間をもテーマに、これまでドイツをはじめとするヨーロッパを中心に作品を発表してきましたが、今年の1月から3月まで大阪の国立国際美術館にて、日本の美術館で初めて回顧展を行いました。そしてこの度、埼玉県立近代美術館と遠山記念館の2館で、新たなコンセプトで個展を開催することができました。広く日本の皆さまに私の作品をご覧いただくことは、私の長年の目標でもありましたので、今、感無量の気持ちです。

竹岡雄二

公益財団法人遠山記念館では、竹岡雄二氏による台座状の作品3点、2点の柱状の作品、金色の1枚のパネル、合わせて作品6点が、遠山邸内外に設置される。伝統的和風建築において、それぞれの作品が畳や人研ぎの床、および敷き瓦の上に、また庭園の芝生上に置かれるのである。これまでドイツを中心に活躍し、美術館やギャラリーを主な展示の場としてきた竹岡雄二氏は、このたびリヴィング・スペース、それも伝統的和風建築の中に作品を置くにあたって、空間を改変することを意図しなかった。むしろ、リヴィング・スペースに作品を闖入（ちんにゅう）させることによって場の在り方が露わにされる。こうして、「台座から空間へ」という命題が果たされるであろう。

遠山公一（慶應義塾大学 教授）

2　竹岡雄二《萩》1988年　個人蔵

「彫／刻／印／刷／物」

《無題》(fig.3)。緑青を吹かせた銅板がガラスケースで覆われています。金属の板を敷き詰めるカール・アンドレの作品を参照し、一枚の板だけを見せる方法を考えて生まれた作品です。彫刻を台座から解放し、「場所としての彫刻」という地平を切り拓いたアンドレは、「台座から空間へ」と展開した竹岡さんにとって、重要な芸術家です。

竹岡さんの《七つの台座》を見ていると、「コンセプチュアル・アートの父」とも呼ばれるセス・ジーゲローブが手掛けた本に参加したアンドレの作品が想起されます(fig.a)。この本は、各25の見開きを与えられた7名の作家が自由に紙面を構成して実現した「印刷物による展覧会」といえます。アンドレは、最初の見開きにひとつの正方形を配置し、見開きごとに正方形がひとつずつ増える作品を手掛けました。この試みは、アンドレによる、プラスチックのブロックを床にまいた作品（1966年）や、金属のブロックを床にまいた作品（2006年，fig.b）と共鳴し、紙面空間と展示空間の連鎖がさらに強まります。

一方、世界の美術雑誌を集積させた竹岡さんの《芸術情報者の頭》は、彫刻を喚起する印刷物とは対照的に、大量の印刷物の物理的な呈示によって、情報という非物質的なテーマを問いかけてきます。ここで示した「彫刻と印刷物」「物質と情報」という切り口は、竹岡さんの作品をとらえる一例です。優れた芸術は、様々な角度からアプローチすることで、その豊かさを開示してくれるのです。

梅津元（埼玉県立近代美術館 学芸員）

3　竹岡雄二《無題》1989年　個人蔵

デュシャンも驚く「台座彫刻」

台座なのか、彫刻なのか、陳列ケースなのか、レディメイドなのか…。外観は明瞭であるにも関わらず、概念的にはどこか揺らぎがある…。それが、竹岡さんの作品の大きな魅力となっています。こういった作風は、作者が「台座彫刻」と呼ぶものに遡ることができるでしょう。70年代半ばに渡独した竹岡さんは、物体の表面をゴムでかたどる制作をしていましたが、やがて、彫刻と台座の不可分な関係に着目し、両者を一体化させた「台座彫刻」を生み出します。それは、彫刻になった台座でもあり、台座になった彫刻でもあるのです。

今回の展覧会では、「台座彫刻」が誕生する頃の思考プロセスを示す例として、歴史上の彫刻作品の台座を描いた一連のドローイングを紹介します。そのうちの1点は、レディメイドの彫刻の金字塔である、マルセル・デュシャンの《自転車の車輪》(1913年）を採りあげており、車輪部分が省かれ、台座のスツールだけが描かれています。レディメイドの彫刻が去勢されたようなこのイメージを、もしデュシャンが見たら、どんな言葉を発するでしょうか。

主を失った台座は孤独に佇んでいるというより、むしろ展示室に存在していることを彫刻に成り代わって誇示しているように見えます。なぜならば、くっきりと床に描かれたその影によって、展示室の空間に台座が鎮座する様子が強調されているからです。これらのドローイングを見ると、彫刻／台座の問題から、彫刻／台座／空間（展示室）という関係に興味が拡張しているのが窺えます。後に竹岡さんが打ち出す「空間呈示」というコンセプトは、既にこの時期から意識されていたと言えるでしょう。

この一連のドローイングは、竹岡さんが広く知られる契機となった、コンラッド・フィッシャー画廊での最初の個展のために描かれました。竹岡さんの原点を探る上では、貴重な作例と言えます。勿論、本邦初公開です。

平野到（埼玉県立近代美術館 学芸員）

4　竹岡雄二《無題》1984年　個人蔵

竹岡雄二　台座から空間へ

国際的な舞台で活躍するドイツ在住の美術家、竹岡雄二は彫刻を置く台座そのものをテーマにした制作から出発し、その後、展示における空間を問う作品へと作風を展開してきました。本展覧会では、埼玉県立近代美術館と遠山記念館の同時開催により、竹岡雄二の芸術を大規模に紹介します。

本展覧会では、竹岡氏が独自のコンセプトで遠山記念館の所蔵品の中から、ものを置いて見せる器や台といった伝統工芸品を7点選び、埼玉県立近代美術館で展示を行うという試みにも挑みます。

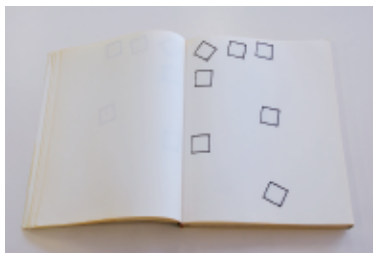
《花枝散蒔絵卓（はなえだちらしまきえじょく）》1457年

「卓」とは文字どおり机を意味する。本作のような卓は、仏前に香炉や花を供える用途で用いられていたことが、中世の絵巻物などに見えている。床の間の前身の一つであり、まさに古様の展示器具といえる。本作の天板の表面には、花を付けた木の枝を散らす意匠が、金の平蒔絵で表されている。また底面には「康正二年丁牛三月日造之」の朱書があり、室町時代の中頃、1457年に制作されたことが判明する、歴史的にも貴重な作品である。

《都名所蒔絵文台・硯箱（みやこめいしょまきえぶんだい・すずりばこ）》明治時代

「文台」もまた平安時代に誕生した机の一種。本来は書き物をする用途であったが、やがて書かれた短冊や色紙を飾る、展示台としての機能を担うようになる。江戸時代・明治時代にも古式を伝える調度品として重んじられ、硯箱とセットで制作されていた。本作は、文台に桜の満開の嵐山、硯箱に紅葉の名所である高尾が、金銀を用いた精緻な蒔絵で表されている。このように桜と紅葉を同時に表す意匠は、「雲錦模様」と呼ばれて愛好された。

解説：依田徹（遠山記念館 学芸員）



a

b

fig.a Seth Siegelaub and John W. Wendler ed., *CARL ANDRE ROBERT BARRY DOUGLAS HUEBLER JOSEPH KOSUTH SOL LEWITT ROBERT MORRIS LAWRENCE WEINER* (known as the "*Xerox Book*"), First Edition 1000, December 1968
※ジーゲローブの個展（Seth Siegelaub: Beyond Conseptual Art, Stedelijk Museum Amsterdam, Dec12, 2015-Apr.17, 2016）を機に復刻版が出版されている。
fig.b Carl Andre, *91 Nickel Scatter*, 2006 (Alistaire Rider, *Carl Andre Things In Their Elements*, Phaidon Press Limited, 2011, p.83)

5　竹岡雄二《マルセル・デュシャン「自転車の車輪」(1913）へのオマージュ》1986年　作家蔵

6　竹岡雄二《ウンベルト・ボッチョーニ「空間において連続する独特な形態」(1913）のための台座》1986年　作家蔵

fig.1,3,4 Photographs by Achim Kukulies, Düsseldorf　**fig.2** 撮影：椎木静寧（遠山邸西棟で撮影）
fig.1,3-6 埼玉県立近代美術館に出品　**fig.2** 遠山記念館に出品
fig.1-6 ⓒ Yuji Takeoka, courtesy of WAKO WORKS OF ART

はみだしソカロ 015　つけたしソカロ：ZOCALO にアルファベットを「つけたし」して楽しもう！ ZOCALOCAL＝ふるさとソカロ。ZOCALOGIC＝ソカロ的思考。ZOOCALO＝カロ動物園。ZOCALOVE＝ソカロ愛。（ソカロイド・50歳・男性）

はみだしソカロ 016　ライアン・マッギンレー BODY LOUD @ 東京オペラシティ アートギャラリー 。強烈な色彩。大自然に身を投げ出す一糸まとわぬ人間。エネルギー充填。（感性のバカモノ・38歳・男性）